



TITLE:

# 中世格言詩の表現と世界像：フライ ダנקの『ベシャイデンハイト』 の語法研究による

AUTHOR(S):

高津, 春久

---

CITATION:

高津, 春久. 中世格言詩の表現と世界像：フライダנקの『ベシャイデンハイト』の語法研究による. ドイツ文学研究 1973, 20: 19-63

ISSUE DATE:

1973-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184948>

RIGHT:

## 中世格言詩の表現と世界像

——フライダンクの『ベシヤイデンハイト』の語法研究による——

高 津 春 久

およそ一二一五年以後の十数年の間にフライダンクが書き残した格言詩、『ベシヤイデンハイト』は中世ドイツの人間と社会を倫理的、宗教的な角度から観察し描き出している重要な書物である。各行が四揚音からなる約四七〇〇行のこの詩はヴィルヘルム・グリムによって「中世に成立したすべての作品の中で、実生活の領域で人々の共感を今なお失わぬとたたえることのできる唯一のもの」と高く評価されている<sup>(1)</sup>。その表題『ベシヤイデンハイト』は今日の「謙虚」とか「控え目」の意味ではなく、動詞 *bescheiden* の本来の語義に近く、「事物を判別する能力」や「見識」を意味している。書名はこの作品の第一行に由来している。詩人は最初この書物に自己紹介をさせ、同時に彼がこの詩作に費やした努力をも控え目に評価させているのである。

Ich bin genant BESCHIEDENHEIT,

diu aller tugende krône treit.

Mich hát berihet VRÎDANC

ein teil von sinnen, die sint kranc.

(1, 1-4)

私はあらゆるすぐれた力の最高のものをもつ

「見識」と名づけられるもの。

いささか力及ばぬ分別によって

「フリーダンク」が私を起草した。

つまりここに語られている神意と人間にかかわる省察のすべては詩人の個人的な立場をこえて、見識の女神の公正な判定として提出されている。中世の人々の世界観と生活の諸問題がここでは実に明瞭に語られ、さながら鏡に映し出されているようである。遠くはなれたあの時代の一般の人々の行為と思考をこれほど身近に把握させてくれる作品は他に見当らぬであろう。伝説や虚構を中心とした同時代の技巧的な詩作品を評価するためには、一方にこの社会の実状とまた一般の人々の生活感情をひずまない形で我々に示してくれるような作品が与えられていなければならぬ。この時代の抒情詩の一節を正しく読みとるにも虚構の基礎となる実像をふまえておらねばならない。フライダンクがこの作品の中で取扱う多くのテーマは、当時の人々の暮しと思考のすべての領域をおおっている。この作品の多くの写本を整理して最も信頼できるテキストを定めたヴァイルヘルム・グリムの編集による章の区分をここにあげれば、詩人がその格言詩によって、およそ彼の時代が内蔵していたすべての問題を広汎にかつ深く取扱おうとしているのがわかる。

- 1、神について
- 1 (b) アヴ・マリアについて
- 2、ミサについて
- 3、魂について
- 4、人間につ

- 5、ユダヤ人について      6、異端者について      7、高利貸について      8、思い上りについて  
 9、現世について      10、罪について      11、富めるものと貧しきものについて      12、誠実と不実について  
 13、盗人について      14、賭博について      15、主人につかえることについて      16、正しさと不正について  
 17、老年について      18、身分高きことと徳操について      19、盲人について      20、密について      21、利益  
 と財について      22、心のわずらいについて      23、医者と病人について      24、憎しみにについて      25、賞讃  
 について      26、誹謗について      27、遊び仲間について      28、怒りにについて      29、天国と地獄について  
 30、僧侶について      31、王侯と君主について      32、賢者と愚者について      33、気前よきものとけちについて  
 34、名譽について      35、酔ばらいについて      36、友について      37、恋と婦人について      38、認識  
 について      39、飢えについて      40、あだな期待について      41、善と悪について      42、未知のことにつ  
 いて      43、いろいろな動物について      44、財貨について      45、ローマについて      46、アコンの町につ  
 いて      47、舌について      48、嘘といつわりについて      49、アンティ・クリストについて      50、十戒につ  
 いて      51、死について      52、最後の審判について      53、一つの祈り

ここには神と世界、万物の最初と終り、現世を織りなす様々な身分、職業、性格の人たちとその行ない、人々の暮しの中で日々起っている物質と心のかかわりが実に簡潔な格言詩によってつづられている。そこに語られた題材とその展開はヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデのそれにきわめて近い。ヴィルヘルム・グリムやヴィルヘルム・ヴァツカーナーゲルらの碩学はかつてこの二人を同一人物とした。しかしヴァルターの格言

詩がもっているあの色彩とトーンのゆたかさにひきかえ、ここには優雅な衣装をぬぎすてた言葉の無骨さ、拔身の剣のするどさがある。やはりヴァルターとは異質の詩人を想定しなければならぬ。

フライダंकを特徴づけるものは、健全な思惟と賢明な洞察から生れて来る飾らぬ言葉の力強さである。その線の太い叙述の底に神のわざに対する深い信念が通っている。万物を創造し、常に欲するところを行ない、清らかな処女の子であるキリストによってこの世の人々を救済し、すべての終りに罪人と善人の上に最後の審判を下される神への信頼が、現世の事柄についても、率直に明確に自由に意見をのべる勇気を彼にあたえている。その言葉は表面的な効果をねらっていない。皮肉な攻撃を仕かけるのもまれである。控え目で真率であり、おしとどめそれだけ一層深くひびく言葉を彼は知っている。彼は実際主観的な表現をひかえて事実をのべ、事実をして語らせているのである。

神のみわざへの信仰が彼のすべての省察を生み出しているのにふさわしくフライダंकは最初の数章を神の世界支配と人間のかかわりにささげている。それは困難な教義解釈の議論ではない。詩人の言葉は人間生活への実践的な視点を失っていない。

Gote dienen âne wanc

deist aller wîsheit anevanc.

Swer umbe dise kurze zit

たゆむことなく神につかえること、

それがすべての智慧のはじめである。

このみじかい地上での時のため

die ewigen vröude gît,  
der hât sich selben gar betrogen  
unt zimbert úf den regenbogen :  
swenn der regenboge zergât,  
sone weiz er wâ sîn hûs stât.

(1, 5-12)

永遠のよろこびをふいにするものは、  
わが身をあざむき  
虹の上に楼閣をきずくもの。  
虹が消えれば  
そのものはどこに自分の家があるかを知らぬ。

果てしなく広がる宇宙、地上に短い生命をいとなむ微小な人間、その胸に巢食う様々な欲望、およそ人間にかかわる存在の謎を少しの疑いもなく解き明かすために、最後は神の意志への信頼とおそれなくてはならぬというのである。すべての正しい認識と賢明な洞察の源は神への帰依であるという。同時にその正しい認識がとらえ得たある時代の具体的な映像がこの作品においても作者の敬虔の所産である。フライダンクがこのように述べるとき、いかにもその言葉は日頃彼の内側で反芻された熟慮の結果を、格言詩という短い枠組の中へと結晶させている。数語のうちに集約された思考の重量が、この種の言葉に固有の断定の強さを与える。しかしこの言葉の断定の強度を支えているものとして彼の思考を触発したにちがいない別のいくつかの言葉を我々はいつも考えておかねばならない。彼の立言はほとんど例外なく先行するいくつかの賢明な言葉を基礎としている。この格言にかわる出典を左に列記する。

Timor domini, principium sapientiae, (Prov. 1, 7)

主をおそれることは智慧のはじめである。

*Initium sapientiae timor Domini. (Ps. 111, 10)*

主をおそれることは智慧のおこりである。

フライダンクは「主へのおそれ」といわず「主への奉仕」という。この言葉つかいに参考となるものは、

*Serviamus placentes deo cum metu et reverentia. (Hebr. 12, 28)*

恐れかしこみ、神に喜ばれるように仕えていこう。

フライダンクの格言詩が好んで読まれていた当時、人々は当然彼の言葉がよって立つこれらの典拠を想起しつつその言葉を読んでいた。彼の言葉はそれが呼び出すいくつかの言葉の連鎖によって人の心にある効果を与えたにちがいない。一方フランツ・プファイファーら、一部の学者はフライダンクの業績を小さく見つもり、それを剽窃家ないしは収集者の仕事と呼んでいる。今日この詩人についての評価は格言詩の表現の本質ともかわり非常にゆれ動いている。この問題を解決するためにも、今少し典拠のことをはなれて彼の格言詩の全体が何を語っているかを知っておく必要がある。

このような神への信仰にうながされたフライダンの省察は、生と死の困難な問題について必ずしも明快な解答を見出していない。神学の説く所によって安易な解説などすることを彼は避けた。その言葉はみずからの真摯な思索のあとをうかがわせている。人間の魂の帰趨について詩人は重大な問いかけをくりかえすのみで終わっているのである。

Got der schephet alle zît

niuwe sêl, dier giuzet unde gît  
in menschen, dâ si wirt verlor.

Wâ verdient diu sêle gotes zorn

ê si zer werde wirt geborn?

disiu vrâge diust ein dorn :

kristen, juden, heiden

mugens sanfte niht bescheiden.

Wie diu sêle si getân,

daz seit mir nieman âne wân.

(16, 24—17, 8)

神はつねに新しい魂を創造し

人間の中へとそれをそそぎ入れられる。

しかしその中で魂はけがれて駄目になってしまう。

魂がこの世に生れる前に、

どこでそれは神の怒りをうけるのか。

この問は刺のように手のやけるものだ。

キリスト教徒もユダヤ教徒も異教徒も

たやすくこの問に答えることはできない。

魂がどのようなものであるか、

そのことを私に確にいえるものはいない。

魂についての一章は多くの問いかけと不可解を告白する言葉にみちている。魂はどこから来てどこへ去るか。その道筋は私にはすっかりかくされている。



Hie enweiz ich selbe wer ich bin.

(17, 27)

この世にあつて私は自分は何者であるか自分でもわからない。

神は魂を与えられる。またそれを取り去られるもよからう。魂はいぶきのように私を去り私を腐肉のように横たわらせておく。

Ichn weiz selbe niht ze wol

wer ich bin, unt war ich sol

(18, 18-19)

私は自分でも大してよくわからない。

私は何者であり私はいずこへ行くべきかを。

詩人はくりかえしこの疑問に立ちかえる。全体を通読するところの問題についての深い懷疑がことにその真摯な人柄を感じさせる。およそ教訓的な姿勢で格言詩をうたった中世の詩人の中で、これほど思索の過程や心の迷いを同時に表にあらわす人を私は知らない。彼の場合は、普遍的な真理を語るはずの箴言が、それを語る人への関心を呼びおこすのである。

詩人が「人間について」の章で語っているのはおよそ次のようなことである。

かつて三種類の人間がおった。一つは男であり父も母も持たなかった(アダム)。今一つは父も母も持たなかったが男から生れた(イヴ)。第三の人間は男の精子により女が生むものである。アダムとイヴの天国を追われ

ること、神がその子キリストを人間の救済のため下されたことなど、三つの人間とキリストのかかわりが述べられる。我々が期待する詩人自ずからの観察による人間論は後の章で展開される。ここではただ神の創造した世界の中に人類の占める位置がキリスト教的な世界観により確認されている。フライダンクはこの時神によって与えられた人類の宿命を動かしがたいものとして提出する。神の意志への彼の動かぬ信仰がことに感じられる。

Elliu menschen sint verloru,

sî werden dristunt geborn.

diu muoter daz mensche gebirt :

von toufe ez danne reine wirt :

der tôt gebirt uns hin ze gote,

swie er doch si ein scharpher bote.

(21, 1-6)

すべての人間は三度生まれなければ

ほろびてしまう。

母が人間を生む。

その後洗礼によって人は清らかになる。

死はきびしい使者ではあるが、

我々を神のもとへと生み出すのである。

人間の生が死と境する区分、その意味づけとともに、地上の生の本質が苦しみにあるという深い認識がこの一章を支配している。

Von swachen sâmen daz mensche wirt,

diu muoter ez mit nôt gebirt :

sîn leben daz ist arebeit,

人間は小っぱな精子より生まれる。

母親がそれを苦しんで生む。

人間の一生それは苦しみだ。

gewisser tôt ist im bereit.

war umbe wirt ez iemer vrô?

ez ist als in dem viure ein strô.

Swer driu dinc bedæhte,

der vermitte gotes æhte :

waz er was, unt waz er ist,

unt waz er wirt in kurzer vrist.

Sus sprechent die dâ sint begraben

beidiu zen alten unt zen knaben :

“daz ir dâ sît, daz wære wir :

daz wir nu sîn, daz werdet ir.

ir komt her zuo uns baz

dan wir zuo ziu, wizzet daz.”

(22 6-21)

確かな死が彼のために用意されている。

なぜ人間はかりにも心楽しくなるのか。

人間は火に入れられたわらしべのようなものである。

次の三つのことを考えるものは

神罰をうけることはないだろう。

自分がかつて何であつたか、そして今何であるか。

そしてほどなく何になるかということ。

地下に埋められているものたちは、

老人にも少年にもこのように語っている。

「我々がかつておまえたちが今あるところのものであつた。

我々が今あるところのものにおまえたちはなる。

我々がおまえたちの所へ行くよりは、おまえたちの方が

むしろ我々の所へ来るのだ。このことを知れ。」

本来フライダンクは人間を魂についてと人間についての二つの章で取扱っているが、人間は大きく分類すると天使と動物の中間的存在であり、天使とは魂の不死を、動物とは肉体のほろびることを分かちあっている。(10, 11c) 人間を語ってフライダンクの言葉は時に二つのちがった姿をとる。それは確信にみちた断定と深いとまどいを示している。魂とは本質的に何か、魂の肉体との結合、肉体からの分離はどうしておくるのか、人間の魂は未来の生活ではどうなるのか、これらの問について彼は深い疑念を表明しなければならなかった。キリスト教的

な世界観にのっとりながら、彼はその心の奥にいつも大きい不可解をいだいていたといえる。

フライダークの事物の認識が、永遠にかわりない普遍的な領域からはじめられ、次第に地上のはかない現象界へと進められるとき、「現世について」の一章は後者の領域をあらかじめ総括し、性格づける重要な導入としておかれている。それはほぼキリスト教の説く所に一致して地上的なあらゆる価値を低く位置づけている。そこに支配する、物質への欲望やこの世の一時的な甘美を見限るようにとの教えは、この詩人の言葉の結晶した力強さによってはじめて人の心を動かせる。

Waz tuot diu werlt gemeine gar?

si alhet, boeset ; nent es war.

(30, 23-24)

この世は総じて何をしているか。

それは年を経るほど悪くなる。そのことを心しておけ。

この世にあつては「私のもの」という一語にまさつて心地よいものは何一つない。

(31, 6-7)

わるいことをするもののほか、今ではこの世の賞讃を得るものはない。

(32, 5-6)

口が笑わずにはおれぬとき心は幾度も泣いている。肉体はここにあつて現世のために生きねばならぬとも、心は神のもとへといそしむべし。

(32, 15-18)

この世の喜びがいかに大きくあろうと死の恐怖がそのそばにある。

(32, 23-24)

現世についての章は次の言葉によって結ばれている。地上の生活の本質を要約するものである。

Zer werlde nint geschaffen ist  
daz stæte si ze langer frist.

(33, 2-3)

長い間変わりなく永続するものは、  
現世では何一つ創られていない。

詩人がこの作品の最初の数章の中で提出した永遠の尺度はこの言葉によって完結する。フライダークの関心は、実ははかない無常の地上の現象の一つ一つに、この神の尺度をあて、その本質を喝破することにあつた。この書の格言の多くが地上にうごめく諸々の人物の行為を描写することについてやされていることによってそれがわかる。この部分を読めば、中世の一般の人々の思想と行動が、賢明な同時代人によって観察され明瞭な真実性をもって我々の前に浮かび上る。

詩人はここで時に具体的でするどい指摘を得意とし、手法的にも先の永遠の問題を論ずる場合とはことなるも

のがある。そしてここでも彼は客観的な事実の提出に自己を限定し、詩人の主観的な見解は、この事実によっておのずとあらわされるような選択を行った。この時彼は具象的映像を詳細にすみあげるのではなく、対象を性格づけるような単文を好んで用いる。王侯、君主、騎士、下僕、百姓、医者、僧侶など、いかなる階級も彼は容赦せず、それぞれの弱点をつく。

フライダンクという名はとかく今日の *Freidenker* を連想させるが、この名が詩人の異名として何かを意味して呼ばれていたならそのような意味をもつではなかった。彼は学識ある遍歴詩人であった。どの階級にも属することなく、彼はあらゆる階層と各地の出来事に勝手な思いをめぐらすことができた。自由思想家ではなく、思考の対象に広汎な選択をほしいままにできる人であったのである。遍歴者の身軽さで彼はこれらの格言詩を書きとめる前に、幾度も公衆の前に立ち、多くの階級を一つずつ批判する格言を被露してかなりの反響を呼んだにちがいない。喝采を送ったのはどの階級非難の矢にもさらされていない都市生活者、商人の群である。ようやく姿をあらわしたばかりの市民階級を噫手として想像しなければ、フライダンクのこの部分の明快な批判精神は理解できぬ。十三世紀の初頭に書かれながら、この格言詩は時代を先取してすでに中世後期の文学の特性をいろいろな面で持っている。ここで階級別に各章を作っている興味深い描写とは別に、すべての人間の行動を律する、根源的で内面的な価値をも合せて論じながら、全体を彼は一つの奥行深い人間論としている。「怒りについて」「名誉について」「認識について」「あだな期待について」などの各章がそれである。愛や憎しみや友情や貪欲について語る部分もそれである。フライダンクは事実の提出によって主観的な批判の言葉にかえようとした。

その方法は、実社会をその内側から入念に観察することによってはじめて可能となる。実生活の中で鋭くときすまされた詩人の眼の働きがこれらの格言の中に感じられる。ここに観察され発見された事柄は生活の親しいかおりをいつも運んで来るが、あたかもフライダंकが身をおき、暮した場所が直覚される思いがする。飲んだくれ、賭博師、盗人、嘘つきなどの描写は、それら生活領域からの真实性をもって、直接彼の簡潔な文章の中へ封ぜられたといった感じである。例えばフライダंकは王侯や貴族を語って実に無遠慮な言葉を用いている。

Die vürsten hânt der esele art,

si tuont durch nieman âne gart.

Maneger durch sine misseât

sins knehtes kneht ze herren hât.

Ine weiz niender vürsten dri,

der einr durch got vürste si.

(72, 25—73, 5)

領主たちはろばの性質をもっている。

かれらは咎で打たれないでは誰のためにも事を行つことがない。

多くの者はその悪い行いのため

自分の下僕の下僕を主人としている。

三人の領主のうち一人でも神の名において

領主であるような場合を私は知らない。

この大胆な直言は封建体制の完成された当時、容易に口にするのできる種類のものではないこと、しかもそれをあえて口にしたフライダंकの不敵さにおどろくのである。この章の中ほどにある次の言葉は、この種の試みが実に危険であることを告白している。

Seit ich die wårheit alle zit,  
sô vündich manegen widersrît.  
dar umbe muoz ich dicke dagen :  
man mac ze vil des wåren sagen.  
seit ich halbez daz ich weiz,  
sô müestich búwen vrenden kreiz.

(74, 23—75, 1)

フライダントクの比喩は常に民衆一般に理解できるように平易で生活に根ざしたものであり、その自然で大らかな思考が見せかけの価値を否定するとき当然のことながら彼の言葉は最も深く批判されるべきものを射る。

Obez der keiser solte swern,  
er enkan sich mücken niht erwern.  
waz hilfet herschaft unde list,  
sit daz der vloch sin meister ist?  
Der keiser sterben muoz als ich,  
des mac ich im wol genôzen mich.

(74, 1-6)

私がいつも本当のことをいうとしたら  
多くの反対に出会うだろう。  
それ故私はしばしば黙らねばならぬ。  
人は本当のことを多くいいすぎることがある。  
私が知っていることの半分でもいおうなら  
私は他国に住まねばならぬこととなるう。

皇帝様が自分は蚊から身を防ぐことが  
できないとちかっといわれるなら  
国をおさめ賢くあっても何の役に立とう。  
蚤が彼の主人なのだから。  
皇帝様も私と同じく死なねばならぬ。  
だから私は皇帝と同等に立つことができる。

中世社会では王侯とならんでその頂点を形作っていた僧侶階級についてもおそらく舌禍の危険をおかしてフラ



イダंकは率直に語った。これらの格言詩は人々に説き教えることを自からの生活で体現せぬ欺瞞者へのきびしい批判となつてゐる。

Man volget michel mère  
eins guotes mannes lère  
dan zehenen, die wol lèrent,  
unt selbe ir reht verkêrent.  
Ich weiz wol daz diu horwege hant  
machet selten wîz gewant.

(70, 2-7)

よいことを教えておきながら、自分では正しいことを  
悪い方へかえる十人の人より  
人はただ一人のすぐれた男の教えに  
はるかにより多く従うものである。  
よくれた手は白い布地を  
めったに作らぬことを私はよく知っている。

genouge gæbe lère gebt,  
die selbe ungebæcliche lebnt.  
Wê dem ougen, daz gesiht  
eime andern und im selben niht!  
Waz vrumet daz ouge keinen man,  
dâ mit er niht gesehen kan?  
Strûchet der daz lieht dâ treit,  
deist den nâch gênden leit.

(71, 9-16)

自らはよからぬ暮らしをする多くのものが  
よい教えを人に与えている。  
他人は見えて自分は見えぬ  
眼はのろわれよ。  
誰かがそれで物を見ることができぬ  
眼などその人に何の役に立つつか。  
燈火をもっている人がつまずくと  
後から歩いて来る者には迷惑である。

フライダंकは僧侶をはじめ他のすべての階層の犯す悪の根源に偽りの罪を見た。それを受けもつ器官については特に「舌について」の一章をもうけ、禍にみちた舌の働きにきびしい裁きを下している。「およそ人が持っている器官の最も悪いもの、それは舌である。」とこの一章は書きおこされている。それは多くの争いと憎悪の種をまき、とかく悪い舌がよい舌を排斥し、死以外の何物も除くことができぬ多くの禍を呼び、多くの国々をみだして略奪と放火を行わせる。人の誠実を絶ちきらせ、いとしい者をいとしい者に対して疎ませる。キリストが十字架にかけられたのはそもそも舌の禍である。

Diu zunge hât nehein bein,  
unt brichet bein unde stein.

(164, 17-18)

舌は骨を少しも持たぬのに  
骨も石もくだき去る。

それにつづく「嘘といつわりについて」の一章は *liegen triegen*... という言葉にはじまる二行の簡潔な規定をくりかえしながら進められる。

Liegen triegen werder sint  
ze hove danne vürsten kint.

(166, 5-6)

嘘といつわりは宮廷で  
王子様より値打がある。

Liegen triegen tuont sô wol,  
daz ir diu werlt ist elliu vol.

GERMAN

(166, 11-12)

嘘いつわりは心地よいもの  
だから世の中全部それで一っぱいだ。

Liegen triegen hânt daz reht,  
si machent krump mit worten sleht.

(167, 16-17)

嘘いつわりは正義をもっている。  
曲ったものを言葉でまっすぐにする

Liegen triegen dringent vür  
zes bâstes unt ze keisers tür.

(168, 11-12)

嘘いつわりは法皇、皇帝様の  
戸口までも進み出る。

フライダנקは悪徳についてだけでなく、美德についても格言詩を書いた。しかし「愛と婦人たち」の章を例にとればミンネザンクの中で歌われている恋愛感情の主観的なより下げ、ミンネと婦人への理想化とあこがれはこの中で語られていない。愛は冷静に人間生活の一つの要素として観察されている。愛にかかわる者の様々なあり方、それぞれの愛の経過や結末が語られている。

ここでは最初、まことの愛と金銭で買える愛の区別が語られる。愛は、それがかなわぬ間は多くの男にものを教えるが、賢明な男でもそれから身を守ることを知らねば盲目にしてしまう。愛すべきものを愛する者は一人の

婦人で満足できるのである。その婦人がすぐれた婦人であれば男はすべての婦人から求めるものをその人から与えられる。拒絶は男が正しい仕方では求めぬところで当然のことながら与えられる。拒絶は婦人のいつもの仕方だが、彼女らには男の方から求めることが好ましい。恋人を持っているものは、相手が不誠実ではないかという心配からめったにまぬがれることができない。男が婦人たちに親しくしているつもりでもそこには大きい疎遠がある。およそ婦人に徳操がみとめられる時、婦人が男よりすぐれている。婦人は多くのあやまちをはじているが、男はそれには注意しない。男はよき婦人にはふさわしくない多くのことによって名誉を得ている。婦人たちがそれによっていやしめられる多くのことが男たちの名誉を高める。これは不公平な結果であり、神はこのような風習を望まれないはずだ。愛とダンスはうぬぼれ屋である。そのいずれもが自分は一番上手と思っている。愛を誰も誓う必要はない。愛は誓言などなくても身を守ることを知っている。

フライダンクが愛や名誉や徳操について、これら人間の内面的な価値について語るとき、彼はつねに人間の社会や生活など、外面的事象とのかかわりにおいてそれらを観察し、とりあつかったので、これらを内面的な価値として絶対化して歌ったミンネザンクのかたわらにおいてそれを見る時、フライダンクが実像によって虚像を冷笑するような効果を出している時がある。十三世紀は科学技術が芽ばえ、事実の認識に重点がおかれはじめた時代である。また都市が社会生活の中心になり、封建的な体制に制約されることのない職人、商人、市民の活動がようやく活潑になりはじめる。すでに格言詩の機能は、それまでに理想化された価値を現実の線にひきおろし、生活の場で再評価することにあつた。中世文学はこの二つの方向をもっていた故に、その虚実の対称によって、われわれはこの時代について大きい視野をもつことができる。十字軍遠征から持ち帰ったサラセンの技術はやがて

封建体制を变容させる。各地に学問研究のための大学が設けられる。文学の領域でも、一つの対象を主観的にうたうことから様々な事象を詳細に描き出し、冷静に客観化する傾向が目立ちはじめ。ミンネザンクがすでに十三世紀後半には、形式的には韻律技巧の遊戯的な操作に、内容面では宮廷生活の文化的洗練の中で賞讃された価値や礼節を農村や都会に移してパロディとするようになった。一二二〇年代に成立したこのフライダンの格言詩は、すでにその傾向を先取しているように思われる。ここでフライダンの格言詩の写本が十三世紀末のもの一つを除いてはすべて十四、五世紀に由来することに注目しなければならぬ。この詩は成立当時の宮廷文化の規範からは逸した、いちぢるしく時代に先んじたものを持っていた。それは十三世紀には求められなかったものである。この世紀が準備した中世後期の、いわば無遠慮な知性を示していた故に、後の時代によって熱狂的に求められた。それはさらに一五〇八年のセバ스티アン・ブラントの翻訳によって近世にも迎えられたのである。

Herzeliep hât manec man,  
der doch vernigernet dran.  
Swer herzeleit muoz eine tragen,  
der mac wol von noeten sagen.

(105, 5-8)

心から愛する人を多くの男はもっている。  
彼はしかしそれにあきる。  
心の悩みを本当に一人たえねばならぬ人が  
苦しみについて語る理由がある。

herzeliep や herzeleit はすでにシンネザンクのテーマ用語といえるほどにしきりと用いられた言葉である。明らかにパロディとしてフライダンはこの言葉を用い、その多用をいましめている。シンネザンクでは心から

愛するものに訴える心の苦しみがくりかえし真剣に歌われていたが、言葉に反してすぐにさめ、さほどでもない  
氣持を苦しく訴える者のいることを物語っている。

騎士生活の最高の規範として求められた現世的な名譽 (êre) もまた、それを現実に維持することの難かしさ  
と、本当にすぐれた人物はみだりに欲しがるものではないことを生活の実例から教えているのである。

Swen man nu vürhet, der ist wert ;

der êren nieman guoter gert.

Êre und elliu werdeheit

sint âne volleist hin geleit.

(93, 2-5)

人が畏敬するものが本当にすぐれた人である。

すぐれた人なら誰も名譽を欲しがらぬ。

名譽とすべての名声は

維持する充分な力がないと失せてしまう。

フライダンクは、中世騎士文学が理想化した諸価値をきびしい生活批判の立場から現実にあるがままの線まで  
引きおろしている。彼の格言詩の存在は物に動じない冷静な見識を代表しているので、すでに中世ドイツの他の  
文学を計量する重要な分銅の意味をもってそれらと対立している。あたかも厳密な認識にその中心をおく作品で  
あることを示すかのように、作品の中程に、他のどのような章よりも大きい「認識について」の一章がおかれて  
いる。これは『ベシヤイデンハイト』全体の約十分の一をしめる分量であり五三章の中の一つとしては異例に大  
きい。ここではすべてを観察し判断したフライダンクが自己の認識の能力を問うている。この作品の可否がこ  
で自己という一点に問われている。作品の中央にあり、すべてがここに集約され、ここより出て行く大切な一章

である。この章では自己についての言葉が目立って多くあらわれる。

Ich weiz von nieman alsô vil  
als von mir selben ; doch ichz hil.

(110, 19-20)

私はおよそ誰についても私自身についてほとんど多く知らない。  
しかし私は自分についてわかったことをかくしている。

Möhte ich mîn selbes meister sin,  
sô hete ich gar den willen mîn.  
möhte ich mir selbe widersagen,  
sô müeste ich mînen vîent tragen.  
möhte ich mir selbe an gesigen,  
ich hete mîne nôt gar überstigen.  
Ich tuon mir selbe leides mê  
dann al diu wert ; daz tuot mir wê.  
mich lieze wol diu wert genesen,  
wolte ich mir selbe gnædic wesen.

(113, 12-21)

私が自分の主人であることができるなら  
私はすっかり欲することを得るであろう。  
私が自分に対して反抗することがあるなら  
私は自分の中に敵をもつにちがいない。  
私が自分にうちかつことができるなら  
私は自分の苦難をすっかり克服するだろう。  
世間の誰よりも多くの苦しみを私自身が  
自分に与えている。そのことが自分にはつらい。  
私が自分にやさしくするつもりなら  
この世は私を安らかにならえさすだろうに。

ここに激しい自己告白の言葉がある。神の世界支配と人間世界を見つづけていた詩人がはじめてここで内省的に自己を語っている。世間の誰よりも自分が一番自己にきびしいという言葉から、フライダंकは日頃自分に大

きい倫理的な要請を課していたこと、自分はそれに答えられぬことを知っていたことが察せられる。私は自分を一番多く知っているが、それをかくすという。これはフライダंकが自己の認識に日頃多くの時を費やしたこと、そして何か自分には暗い衝動に追いつづけられるおそろしいものを発見したのか、自己を徹底的に認識しつつしてそれを明らかにすることをばかっている。この部分のふくみのある、謎めいた言葉にそれが感じられる。

フライダंकのこの作品を教訓詩というのはあやまりである。そこに述べられているすべては、このように誠実に控え目な人柄から由来する独得の信仰告白の響きをもっており、充分には述べつくされていない自己への認識をその中核として成立っているようである。そこには自己を棚上げしてもっぱら他に立ちむかう教訓詩の響きがない。フライダंकは最初ラテン語の教訓詩 *de discretione* をドイツ語で書こうと思ひ立った。彼はこの本来の意図からほどなくそれたようである。自己観照を中心として周囲の人間社会、宇宙、神の摂理へと思索の輪を広げて行く彼の方法では、すべてが信条告白的な真摯なものとならざるを得なかった。僧侶や王侯を非難するフライダंकの言葉には同じ刃を自己に向けている真実の響きがあり、自己とかわりないものを思い切り冷笑する言葉ではない。認識の苦しみと共にここにはまた自からの認識の自由をたたえる言葉もある。

diu bant mac nieman vinden,

diu mîne gedanke binden.

Man vâhet wîp unde man,

gedanke niemen gevâhen kan.

Sô dicke sint nîergen mûren dî,

私の考えをしるる繩を

誰も見つけることはできぬ。

人は誰でも身柄を捕えることはできる。

考えを捕えることはできぬ。

私がそれをつらぬいて物を考えることができぬほど



ich gedenke wol durch si.

(115, 14-19)

壁三枚が分厚いことはめったにない。

身柄を拘束することはできても人の思考は拘束できない。また思考は壁をめぐらしてその働きを制約することができないものでもない。正にフリーダंकと自称するいわれが語られている。思考は自由にかけることができる。しかし考えられたことは常に真実であるとは限らない。思考の自由とともにその真実を保証せぬたよりなさも同時にフライダंकのしばしば指摘する所である。思考は眼による確認に劣るのである。

Swaz mìn ouge reht ersiht,

daz weiz ich unde wænes nih.

ich wæne maneges daz man seit,

unz ich ervar die wårheit.

(115, 22-25)

私の眼が正しく認めること、

それを私が知るのであり思ふのではない。

真実を実際知るまでは

人がいろいろなことを私はただ思っているだけだ。

知ることとただ想像していることに大きいへだたりを認め、事物を認識する時に、人は最終的に知るまで対象をきびしく追求しなければならぬといっている。先の人間の魂の本性を知らずとした詩人の言葉は、このような正しい認識を求める態度の緊迫を感じさせていた。彼が天上と地上のことについて述べていることは、すべて度重なる熟考と確証を経たものにちがいない。

die liute kan ich üzen spehen,  
ichn kan niht in ir herze sehen.

(116, 3-4)

人々を私は外側から観察することはできる。  
彼らの心の中まで見ることはできない。

彼がこの格言詩の中でこころみているさまざまな人間についての省察はこのような制約を意識した上のものであった。それ故彼は外側からの観察を一層深めて行き、それをやがて対象の心にまでとどかせている。

Wir leben al nâch wâne ;  
der sorge ist nieman âne.  
Mich dunket, swâ ich eine bin,  
ich habe tûsent manne sin,  
unt kume ich dâ die liute sint,  
sô bin ich tumber denn ein kint.

(116, 7-12)

我々はみな先を当てにして生きている。  
だのに誰一人心のわずらいのない人はいない。  
私は一人でいる時、自分が  
千人の男の分別を持っているように思われる。  
だが人々の集まっている所へ来ると  
私は子供より無思慮なのだ。

想像や主観の、外界から閉ざされた領域で日頃人間がおかすあやまちや迷いがこのように指摘されている。二行または四行単位の独立した格言が並び、叙述の流れが断たれるこのような作品では詩人が深く意識していたことが表現を変えて幾度もあらわれる。認識はつねに想像によっておびやかされ、あやまった結果へと導かれることを詩人は自省している。実に「思う」は「知る」ではないことを彼は様々な表現によって強調する。二行の短

い押韻句という最も小さい表現単位の中に熟慮された内容を切り込むその格言詩の構造は、主観のおかすあやまちから自己をまもって冷静に認知する努力が語形式へと結晶したものである。この「認識について」の一章は次のような言葉で終っている。

Ich kan mit allen sinnen  
mir selbe niht entrinnen.

ich entriune gerne, wiste ich war :

sô bin ich mensche, swar ich var.

(124, 13-16)

私はいくらそうしようとしても、自分が

自分からのがれることができない。

どこへかを知っていたら私は逃げだしたいものだ。

ところで私はどこへ行こうと人間なのである。

先にフライダンクは「世間の誰よりも多くの苦しみを私が自分に与えている。」と告白し、自分の心が自分を見つめ、きびしく非難することを訴えていた。この言葉は先の表現と呼応して詩人が自分の内奥を最も卒直に語っている部分であろう。ただ近代の詩人がそこから語りはじめる内面世界の入口でフライダンクは何かを暗示しただけで口ごもる。このような言葉には暗示に応ずる鋭敏な耳もまた多かったにちがいない。私はどこへ行こうと人間なのである。——多くの矛盾をはらみ、また多くの衝動におしやられる存在を彼はただこのような言葉にあらわした。『ベシヤイデンハイト』は中世の格言詩が多くそうであるように、必ずしも一つのテーマについて語られた言葉のみがある段落を作り出しているのではない。そのために神の創造をたたえる部分のどこかに見逃がせぬ詩人の自己告白が組み入れられたり、天と星辰の運行が語られた後、何の前ぶれもなくある一つの人間の行

動が話題とされる。しかし全体を読めば時に埋め草のように響きのさえない二行または四行の言葉のつづく中に、その言葉の真实性と表現密度の高さで数等他を抜くような格言が方々にはめ込んであるのに気づく。宇宙と人間世界のカオスをあらわすもののように、故意にテーマの配列をみだし、表現に休息と高場の落差を設けているのが我々には不思議な印象を与えずにはおかぬ。フライダंकの場合は、このようなカオス的な世界の中に、所々で呼応し合っている自己についての告白的な言葉が読む者の心に残るとともに全体に一つの個性的なものを与えている。例えばそれは認識についての一章にかぎらない。

Mir sint strateclche bi

vil starker vfiende dri :

diu werlt, unt des tiuvels list,

min herze der dritte vfiend ist.

got mac mich vor den zwein ernern,

ichn mac mich sherzen niht erwern :

wan daz wachet alle zît,

sô der lip mit slâfe lit.

Des herzen ouge hât niht bant,

ez siht inz mer, durh elliu lant :

durh himel unt durh helle nider

siht ez, unt kumt doch schiere wider.

私のそばにはいつも

非常に強い敵が三人いる。

現世と悪魔の悪だくみと

第三の敵は私の心である。

神が私を二つのものから救うことができる。

私はただ私の心から自分を守ることができない。

なぜなら心は肉体が眠って横になっている時も

いつも目覚めているから。

心の目は何物にもしばられぬ。

それは海の中もどんな国でもくまなく見る。

空をも下の方の地獄をも見わたす。

だがすぐまた帰って来る。

(69, 9-20)

彼は「天国と地獄について」の章もこのような言葉で結んでいる。常に目算めてすべてのものを見つめている心はフライダンクに、あるいは良心の痛みを与え、なすべくしてなし得なかったことを思い出させ、いつも彼を苦しめながら前途を悲観させていたにちがいない。この点について彼が幾度もふれていること、そしてそのたびに謎めいた暗示に終っていることはこの格言詩人を最後のな解に達することのできぬ思索家として印象づける。

以上フライダンクがこの書の中で展開する事柄を重点的にとりあげ、その概要を示そうと試みた。ヴィルヘルム・グリムが一八三四年に諸写本を検討してテキストを校訂出版して以来、研究家はフライダンクの格言の背後に、聖書や古典詩人、ラテン語詞華集、当時の他の詩人の言葉の中から、フライダンクと同様の表現や、明らかに彼にとって典拠となったと考えられるものを見出した。それらの成果はベッツエンベルガーやジンガーの詳細な注釈の中に集められている<sup>(2)</sup>。今日までのフライダンク研究はそれら多量の参考資料とフライダンクの言葉を比較し、この詩人の業績を評価しようと試みた。この詩人については才気ゆたかな箴言詩人とするもの、巧みな剽窃家とするものと、今日なお極端に見解が別れている。ヴィルヘルム・グリムはすぐれて個性的な詩人をフライダンクにおいて見た代表的な人である。「私は十三世紀の最初の四分の一世紀の詩人たちの中にフライダンクにも出て来る格言を見つけた。それらは必ずしも一語ずつ一致するものではないが、明らかにかわりあるものであ

る。そこから私はこれらの詩人が『ベシャイデンハイト』を知っていて利用したという当然の結論を引き出した<sup>③</sup>。  
「他の詩人にも出てきてフライダンクと関係のあるこれらの格言を比較してみるなら、フライダンクの方によりすぐれた独創的なものが認められる<sup>④</sup>」

さらに当時人口に膾炙した俚言からフライダンクが採用したものについてグリムはいつている。「フライダンクが古くからあったものを借りたとも、あるいは彼が後世のことわざの源ともいうことはできない。むしろフライダンクと民間のものは共通の土壌の中からちがった形をとって生え出たのである<sup>⑤</sup>」

グリムはフライダンクをヴァルターの別名だと思っていた。グリムのテキスト編集は偉大な詩人が宇宙を自らの独自の見解にしたがって組織分類しようとした試みを深い尊敬をもってあとづけている。各章の配列はグリム独自のものである。それは雑然とした思考のカオスを強調するパウルの編集と好対称をなしている。

フライダンクに独創的な才能を見たグリムに対して、これを剽窃詩人と見たのはフランツ・プファイファーである。「フライダンクは彼がすでにそれを読み知っていたと思われる同時代人や以前の詩人の作品から自分の格言集に使えるようなものを自分のものとし、言葉通りに、あるいは自由な形で採用した。……およそ格言蒐集家が見つかり次第、人の口元からまたは本の中からでもそれらを取り入れること以上に当然至極なことがあるのか。……『ベシャイデンハイト』は、一二三〇年以前のドイツの詩にとってその源泉であるのではなく、むしろ部分的にはそれより流れ出したのである。フライダンクは蒐集家、整理家、修正者以上のものではない<sup>⑥</sup>」  
しかしプファイファーはこの点を実証したわけではない。彼はこの課題を未来の研究に託している。グリム以

後の研究家の中では、ジンガーやノイマンを除けば、フライダンクの表現力によってはじめて後の世に長らえる格言となり得たものの多いことを認めながらも、当時までのヨーロッパの箴言と省察の集大成者、詞華集編集者として彼を性格づける学者が多い。

フライダンクを詩人として評価するときに、その典故と考えられるものを列挙するものは多いが内容と詩形の両面から、両者の関係をとらえ、実証的な方法で、この詩人の性格づけを行ったものを私は知らない。ただライツマンは、表現と内容の点でほとんど近似的であるので、すでに今までにいずれか側の借入がブファイファーやグリムによって問題とされた部分について考証を加えている。その時間問題となるのはいずれが借入れたかを決定することであり、表現の相違の評価ではない。それらはハルトマン・フォン・アウエ、ヴィガロイス、クラレー、ヴィンスベケ、ヴィンスベキン、トマシン、ルードルフ・フォン・エムスなどのある箇所表現とフライダンクを比べている。その結果、直接的借入と見られる場合はかなり少ないのである。

フライダンクの場合、典故との比較が容易に行えない一つの理由がある。彼のある一つの格言詩に対してその出典と見られるものは数ヶ所に及ぶ場合が多い。彼がそのうちのどれを下敷としたかを決めること、あるいはグリムの指摘するように、典故と見られているものとフライダンクは前後の関係にあるのではなく、巷間にいいならわされた一つの俚言から同時に生じたものなのかどうかを決めることなど、いずれも今の時点ではかなり困難な問題がひかえている。ベッツエンベルガーの研究は今日までに書かれたフライダンクの研究書の中ではそれぞ

れのフライダंकの言葉について最も多くの出典をあげる力作である。しかし評価にかかわる比較をしているのではない。

フライダंकのこの格言詩の第一句がすでに聖書の言葉にもとづくものであることはすでに指摘した通りである。三つの聖書の言葉は彼の内部でその意味が充分消化融合され、新しい言葉へと創造されていた。ノイマンはフライダंकの言葉の創造性は、彼が採用したものと文に特に忠実である所であられることが多いといっているが、実際どのように創造的な融合が果されているかを一つずつの例で検討することが必要である。

フライダंकは人間の魂について、中でもその肉体との結合、分離の不思議について語っていた。およその問題についてフライダंकが何を彼の言葉の基礎とし、どのように変えているかを見よう。

Got der schephet alle zit / niuwe sêl, dier giuzet unde git. とうう表現について、ベッツエンベルガーはかわりある出典として三つのものをあげている。

*creando infundit et infundendo creat* (Augustin. de anima et eius origine)

神は創造することにより注ぎ入れ、注ぎ入れることにより創造する。

*omnis anima opus dei est, carnis generatio semper ex carne fit.*

(Hilar. trin. 10, 20)



すべての魂は神の創られたものである。肉体を産むのは常に肉体によって行われる。

als das kind lebende wirt in sîner muoter lîbe, sô giuzet im der engel die sêle in : der almechtige got giuzet dem kinde die sêle mit dem engel in. (Berthold 209)

子供がその母の胎内に生まれると、天使が魂をその中に注ぎ込む。全能の神は天使と共に魂をその子の中に注がれる。

レーゲンスブルクのフランシスコ会修道僧ベルトルト（一二七二年没）はフライダンクの『ベシャイデンハイト』を知っていたであろうと思われる。とにかく、子供は胎内にやどると守護天使とともに魂を神によって与えられるということはすでに古くから信ぜられていた。『注ぎ入れる』という表現もアウグスティヌスやヒラリウス以来用いられフライダンク独自のものではない。

ところで個々の魂の根源や本来清浄である魂が人間の中に入ると、それが荷う原罪によってけがされるということについて、当時教会のドグマは正式には何の決定も下していなかった。スコラ哲学者によって種々議論されていた所である。世上、**靈魂伝移説** (Traduzianismus 後世異端とされた古代教会の教えで、人間の魂は人が父によってつくられるとき、父の魂の引きつぎ手として生れるという説) と**靈魂創造説** (Kreatianismus 神はそれぞれの人間の魂を各々無から創り出されるというカトリック教の教え) の対立があり、大勢はやや前者に傾いていたが、フライダンクはこの格言から後者を支持していたことがわかる。

17.<sup>2</sup>より17.<sup>8</sup>までのフライダンクの言葉は魂の問題についての不可知をなげいているが、これは当時の言論界の状況をよく反映しているといえよう。ちなみに、*Kristen, juden, heiden / mugs sanfte niht bescheiden.* という言葉とかかわるものとして、ベッツエンベルガーは次の典拠を指摘している。

*Kristen juden heiden die kunnen niht bescheiden dīnu wunder wunderlich. dīnen wundern ist niht gelich.* (*Kaiserchr. Massmann 2, 889 v. 21*)

キリスト教徒、ユダヤ教徒、異教徒もあなたの不思議な不思議を説明することはできない。どんなものもあなたの不思議ほどのものはない。

ベッツエンベルガーはほとんどすべてのフライダンクの格言が何か典拠をもっているといっている。四世紀以来の神学的な思索の成果をゆずりうけて彼の言葉使いは過去に残された様々な言葉の上に立脚しているのは事実である。しかしその中で「魂がこの世に生れる前にどこでそれは神の怒りをうけるのだろう。この問はたやすく答えられるものではない。」という問いかけと不可知の告白は何物にもとらわれぬフライダンクの心からの疑問をあらわしている。彼の長い思索の苦しみや人間存在の不思議への詩人の驚きを直接伝えるところの言葉である。

フライダンクが人間について語っていることも大部分当時の神学上の教義にのっとるものである。要するにそれは人間の存在を微小なはかないものとし、その生涯を苦しみが始まり苦しみに終るものと規定していたのである。

る。22, 6 から 22, 11 までの部分に対する出典として、ベッセンベルガーは次のものをあげている。

*homo natus de muliere, brevi vivens tempore, repletur multis miseriis. qui quasi flos egreditur et conteritur, et fugit velut umbra, et nunquam in eodem statu permanet.* (Job 14, 1-2)

人間は女より生まれ、短い時を生き、多くの不安にみたされている。花のように開き、枯れ落ち、影のようにすぎ去り、同じ状態にとどまることがない。

*multa est vita hominis super terram et sicut dies mercenarii, dies ejus.* (Job 7, 1)

地上での人の生活は軍務のように苦しく彼の日々は日雇人夫の日々のようである。

*homo nascitur ad laborem.* (Job 5, 7)

人は苦しむために生まれる

*ultima semper expectanda dies homini est, dicique beatus ante obitum nemo supremaeque funera debet.*  
(Ovid. met 3, 138)

人間にとってつねに最後の日が待たねばならぬ。誰も死んで最後の葬儀がされるまでは幸福とは呼ばれない。

Uns ist nicht gewisser danne der tót, des nimt wunder mich, daz ieman wirdet wol gemuot. (spr. str. 1, 6-7)

我々にとって死よりも確実なものはない。誰かが心楽しくなるのが私には不可解である。

フライダンクは教養人であり、ことに古典文学や聖書の内容にはよく通じていたので、このような資料は言葉通りではなくとも、すでに思想内容として彼の内部に貯えられていたにちがいない。しかし今これらフライダンクの背後にあるいくつかの格言的な表現とフライダンクの言葉を比較するとき、その関連は内容の近似性に止まる。プファイファールのようにフライダンクを剽窃者、集大成者とするのは妥当でないと考えられる。しかも先例となる作品に何らかの依拠、模倣を行うことは当時の芸術のすべての分野で通常行われていることであった。

それは責められることではなかったのである。すぐれた生活の智慧や面白い物語は人すべての共有の財産であり、誰もがそれらを語りつき、よりすぐれた財として伝えることに加わった。人間について語るときフライダンクが右のようなキリスト教的な解釈に内容のみならず部分的には表現の点までもしたがっているのは、彼の生きた時代を思えば当然のことである。

しかしその言葉使いをよく検討するならば、彼の格言が以前のものの踏襲ではなく新しいものの創造であることが明らかになる。

人間存在のはかなさ、その弱々しさは、彼の場合、簡単な断言の中にも周到にえらばれた語句によって表現さ

れている。人間が微小なものから生まれること、これはその存在の本来的な脆弱さを規定した独自の表現である。つづいて「母親がそれを苦しんで産む」という言葉の、「*mit not*」はすでに人の生存は苦しみのみ、という第二の規定を準備しつつ、その出生がすでに苦しみにもなわれることを強調している。彼の言葉は手短かな文章のみにある断定の強い響きをもっており、人の心に一つずつの重大な事柄を打ちこむように進んで行く。四揚音で二行ずつ押韻し、原則的にこの押韻単位を意味単位と一致させている。この素朴であるが断定力の強い言葉はすでに出生に関する入念な用語のあとをうけて、「*Sîn leben daz ist arbeit*」「彼の一生、それは苦しみだ」という。これは「人は苦しむために生れる」よりもさらに直截であり、言葉の技巧を避けている。しかもこの言葉を準備する、表現力の集約せられた文が先にあった。出生とその後の生涯を苦しみとはかなさでつなぎ合わせる文脈が通うている。無技巧な短文の連続がフライダントクの実に深い思索力によって有機的につなぎ合わされていることに気づく。さらに

*Uns ist niht gewisser danne der tôt, des nimt wunder mich, daz ieman wirdet wol genuot.*

これと同じ内容をあらわすのに彼は凡俗の胸を刺す二つの言葉を並記した。

*gewisser tôt ist im bereit. warumb wirt ez iemer vrô?*

ここに重大な事実をつきつけ、問をたたみかけるきびしさがある。深く認識した事実を、直接話法のするどさで人に訴える話術がある。

in omnibus operibus tuis memorare novissima tua, et in aeternum non peccabis. (Ecclie. 7, 40)  
すべての汝の仕種において汝の終末を記憶せよ。されば永遠にあやまつことなからん。

nostra quoque ipsorum semper requieque sine ulla corpora vertuntur, nec quod fuimusve sumusve,  
cras erimus. (Ovid. met. 15, 214)

われらの肉体もまたつねに休みなく変化している。もう明日はわれらがかつてあったもの、今あるものではなくなっているだろう。

Disce quid es, quid eris, memor esto, quod morieris. (lat. sprichw.)

汝は今何であり、何であるだろうかを学べ、汝が死ぬであろうということを覚えておけ。

dāmit diu werlt al umbe gāt, des sint niuwan diu wort : ez was, ist oder wirt. (spr. str. 22, 1-2)

この世がそれにかかわるところのものはただ三つの言葉である。つまりそれはあった、それはある、それが生ずる、の三つである。

現在、過去、未来にわたり自己の存在をつねに問うべし、というフライダンの教訓は、右の例が示すように、古典ラテンより中世ドイツにかけてすでに云いまわしとしては充分定着していた。ここでは「次の三つのことを

考えるものは神罰をうけることはあるまい」という言葉だけがフライダंकのものとして新しく加えられている。この前置きは人間の定めを深く認識させるために必要であった。フライダंकは人間の罪科を論じた章の中で人の犯すあやまちの最大のものとして、尊大の罪 (*superbia*) をあげている。人々に三つのことを考えさせるのは自からの存在のはかなさを知り、節度ない過ちへと赴くことをいさめるためである。全体を通じて伝えられた言葉の意味づけにフライダंकは十分な感情移入を行う。死の認識を人々に呼びかける言葉は、彼自身の言葉によって、*“in kurzer vrist”*「はぐなぐ」と強められている。

それにつづく、地下にあるものが生きている者らに語る言葉は昔から多く墓碑銘や墓地への入口に記された言葉であって、ラテン語で次のようにいわれた。

*Auribus et corde haec mea dicta tene :*

*Sum, quod eris ; quod es, fui ipse, derisor amarae*

*Mortis, dum licuit pace iuvante frui.*

(*Discl. cler.* 37, 3)

耳と心で次の私の言葉をよくとらえよ。私はおまえがいつかあるであろうものである。私自身がおまえが今あるものであった。つまり、わが身を助ける安穩を楽しむことができる間は、にがい死を冷笑するものであった。

フライダंकは表面的にはこの言葉をそのまま自分の格言詩の中に入れたにすぎぬ。死を体験した者の、地上に生きる者への直接の声をフライダंकは見逃がすはずはなかった。それは人間存在の根底にある死を、生きる者の意識にのぼす最も効果的な方法である。人間を語るとき、生きる苦しみと死をもっぱら語っていた彼は、以前のすべての断片的な言葉を組織的につづり合わせ、それを心のかような力強い観察にまとめあげている。

神学的な事柄はベシヤイデンハイトの中で最も典拠に忠実に述べられている。そこには典拠への逐語的な追隨すら見られたのである。しかし、フライダंकの観察はそれらの古くから伝えられた言葉を充分に自己のものとして生かしている。彼の観察がより地上的な問題に及ぶとき、彼自身の省察がはるかに力強く自からの言葉によって述べられているのがわかる。この領域では聖書や古典詩人の作品が典拠であることはまれであり、彼が何かによる場合は同時代の民間のことわざなどから、他の詩人たちとともに生活の智慧を得ていることが多い。観察する眼をもっていれば身のまわりに起る事象が何よりも真実を教えてくれるからである。皇帝、貴族を語り、僧侶を語るフライダंकは自己の観察を自由な創意をもって言葉に移している。「蚤が皇帝の主人であること」「よごれた手は白い布地を作らぬこと」「骨のない舌が人の骨をうちくだく」これらの民衆の智慧の真实性を深く理解し、自己の観察によって裏づけているのである。

そしてフライダंकがこの大きい格言詩の外側の層を普遍的で客観的な事柄で作りあげ、その中層を客観的で



はあるが詩人の身の生活と人間群像により形成したならば、その内側に省察者自身の心と認識の問題をひそめておいた。この部分を私はこの格言詩全体の中核と考える。詩人は外層の一番固い殻を典拠性の強い言葉によって作ったのである。中層では眼の働きを生かして典拠の利用を控えている。最も内省的で人間的な部分を、この典拠の多用によって剽窃家とまでうたがわれた人はどのような方法で作らあげたであらうか。フライダंकがまず自己について語る言葉は、「私は自分自身について誰についてよりもよく知っている。しかしその自己についての認識をかくしてしまっている」というのである。ところで自己を知ることのむつかしさを説いた言葉は古来多い。この部分についてベツツエンベルガーは「何人も自分には一番少なく知られており、自分について知るとは一番難しい」(Cic. de or. 3, 33)「すべての人間の本性は、他人の本性は自分のよりよく見、よく判定するという風にできてゐる」(Terent. heaut. 3, 1, 97)の二ヶ所をフライダंकの言葉の基礎においたが、それらはいずれも自己の認識を一般に難かしいとするだけである。フライダंकは本当は人間には、他よりも自分がよくわかるのであるが、本来は見える自己を自分で見えなくしてしまっているだけだ、という。おそらくフライダंकは、古典詩人や当時の一般民衆の間での認識についての言葉をかなり自分の考えによって修正している。何よりも彼が用いている一人称体による深い内面告白の文体が詩人の主体的な表現への意欲をよく示している。

113, 12 以下の部分に、ベツツエンベルガーはかなり多くの古典との符合をみとめている。

*Imperium habere vis magnum? impera tibi.* (Pub. Syr.)

汝は強大な命令権を持つことを望むや。汝自身に命令せよ。

Bis vincit, qui se vincit in victoria. (Pub. Syr.)

自己にうちかつて勝利するものは二倍勝利する。

Imperare sibi maximum imperium est. (Sen. ep. 113, 24)

自分に命ずることが最大の命令である。

Quantum potes, te ipse coargue, inquire in te. (Sen. ep. 28, 10)

できるかぎり汝自身を罪人とせよ。自分をあはきたてよ。

Suum quisque igitur noscat ingenium acremque se et bonorum et vitiorum suorum iudicem praebeat.  
(Cic. de off. 1, 114)

何人も自己の能力を知り、自分に對してその長所も欠点もきびしく判定せよ。

これらは自己にきびしくあることをいずれも他に命じている。同じ必要を語りながらフライダंकの場合は何とちがった痛切な言葉使いであろう。「世間の誰よりも多くの苦しみを私は自身に加えている。そのことが自分にはつらい。私が自分にやさしくするなら、この世は私を救ってくれるだろうに。」この言葉はすでに教訓詩の領域の外にある。この告白故に彼の言葉は古典詩人の教えよりも実行へと人をうながす力をそなえている。

フライダंकは人間の認識能力についてその確かさを疑う言葉をしきりともらしていた。眼による目撃はただ対象を思うことにまざるといった後、すぐに眼の働きすらも否定的にとらえている。「人々を私は外側から観察することはできる。彼らの心の中まで見ることはできない。」この部分に関する出典は次のようなものである。

*Ex visu cognoscitur vir, et ab occurso faciei cognoscitur sensatus. Amictus corporis et risus dentium et ingressus hominis enuntiant de illo. (Ecclie. 19, 26-27)*

見るにより人は知られる。顔を見合わせば賢者は知られる。身体についた衣服、齒の浮べる笑い、人の歩き方が彼について明かしている。

視覚によってとらえられたものが人間の内奥を十分に語っているという考え方をフライダंकは全く否定した。彼が認識においていかに懐疑的であるかがわかる。そしてこの困難な認識を自己の問題として一人称によって語っているのも原拠に対する大きい相違である。それ故ジンガーは

*Homo videt ea quae parent, Dominus autem intuetur cor. (I Regum 16, 7)*

人は外にあらわれるものを見るが、主は心を見られる。

この言葉をフライダंकの直接の典拠とするのである。

116,<sup>7</sup> 以下の部分について考えられる典故は、

*Credula vitam spes fovet ei fore cras semper ait melius.*

(*Tib. eleg. 2, 6, 19*)

明日をたよる希望が生活をはぐくむ。そして希望はいつも明日はもっとよいと保証する。

*du kristenheit gelebte nie sô gar nâch wâne.* (Walther 33, 31)

キリスト教世界はかつて今ほど出たらめな生活をしたことがない。

このような言葉のほか別個に、人の心の悩みの絶えぬこと、千人の男の分別を語る典故もある。しかしこれらをえらび、つなぎ合わせて、想像に頼って生きることの危なさを説く文を作ったのはフライダंकである。

フライダंकの言葉は自己の内奥を語る部分で典故からの大きい飛躍をとげている。この大きい格言集の中に、一切の過去の言葉とは無関係に詩人が自分の眼で見た重大な歴史的事実を語っている一章「アコンの町について」とならんで、これらは素裸の人間フライダंकを見せている部分として重要であり興味深い。この章は彼が

フリードリヒ二世のひきいる十字軍に加わって、十字軍兵士の前進基地であったアッカの港町にあつて執筆した格言詩である。食物、風土ともにドイツ人に苛酷なこの地は、多くの十字軍兵士の命をうばい、そこに住むキリスト教徒は悪徳にそまり、純潔な詩人の心に痛みと失望を与えた。目前の恐るべき事態の報道と詩人の沈痛な弾劾の言葉は特異な文体を生み出している。あまりに遠くへだたて、ほとんどが知られなくなった彼の生涯に、この部分だけが切り抜かれたように明白であり、詩人の求心的な言葉と体験の間に明確な線が引けそうに感じられる。このフライダンクについての論考は本来そのような人間的な部分から逆に詩人の言葉の普遍的で典拠への依存が大きい部分がうかがうことであつた。

## 註

- (1) Fridankes Bescheidenheit von Wilhelm Grimm. Göttingen 1834  
Einleitung CVII
- (2) Fridankes Bescheidenheit von H. E. Bezenberger  
Neudruck der Ausgabe 1872. Aalen 1962  
Samuel Singer: Sprichwörter des Mittelalters. 3 Bde. Bern 1947  
Fridankes Bescheidenheit Bd.2 S.153 bis Bd.3 S.199
- (3) Wilhelm Grimm: Kleinere Schriften. Gütersloh 1887 S.104
- (4) ebd. S.106
- (5) Fridankes Bescheidenheit. Einleitung XC
- (6) Franz Pfeiffer: Freie Forschung. Wien 1867 S.185
- (7) Friedrich Neumann: Meister Freidank  
Wirrendes Wort, Sammelband 2. Düsseldorf 1963 S. 259-269  
Ders.: Artikel "Freidank". Die deutsche Literatur des Mittelalters,

Verfasserlexikon, Bd.I 1933 Sp. 660-670

(∞) z. B. Bezenberger S. 45

(∞) Albert Leitzmann: Studien zu Freidanks Bescheidenheit

Abh. d. dtsh. Akademie d. Wissenschaft zu Berlin

phil.-hist. K. 1948 No.2 Berlin 1950